部則をどう語るのか
―本学女子バレーボール部を対象として―

近藤　佳歩理　（競技スポーツ学科　スポーツ情報戦略コース）
指導教員　豊田　則成

キーワード：部則，所属意識，浸透化，役割の模索，思考の深まり

１．緒言

本研究は，「**本学女子バレーボール選手は部則をどう語るのか**」というリサーチ・クエスチョン（Research Question：以下 RQ）の下，部則についての語りに着目した質的なアプローチを行い，そこから発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目的とした．

２．方法

インタビュー調査の対象者となったインフォーマント（Informant：情報提供者．以下 Inf.）は，本学女子バレーボール部に所属している部員１２名（Inf.A～L）であった．インタビューマニュアルを基に，一人あたり３０分程度（１対１形式）の半構造化インタビューを実施した．

３．結果と考察

本研究は，「本学女子バレーボール選手は部則をどう語るのか」という RQ の下，『**部則に対する考え方の変容から部則を守ることによって所属意識が高まると，チーム内での役割を模索するようになり，同時に部則が浸透することで思考の深まりへと至る．そして思考の深まりによるさまざまな気づきに対し，さらなる模索を繰り返すといったプロセスとして語る**』という仮説的知見が導き出された．Figure１には「部則によって思考が深まるプロセス」（下記参照）を示した．

４．まとめ

本研究から「部則」とは，守ることで所属意識を高め，自身の役割を模索するようになると同時に，部則が浸透し社会的常識を獲得することで新たな考えや視野の広がりへと繋がる．それらの思考の深まりによって，さらに役割を模索するというサイクルを何度も繰り返すことが部員に思考の習慣を身につけさせる．

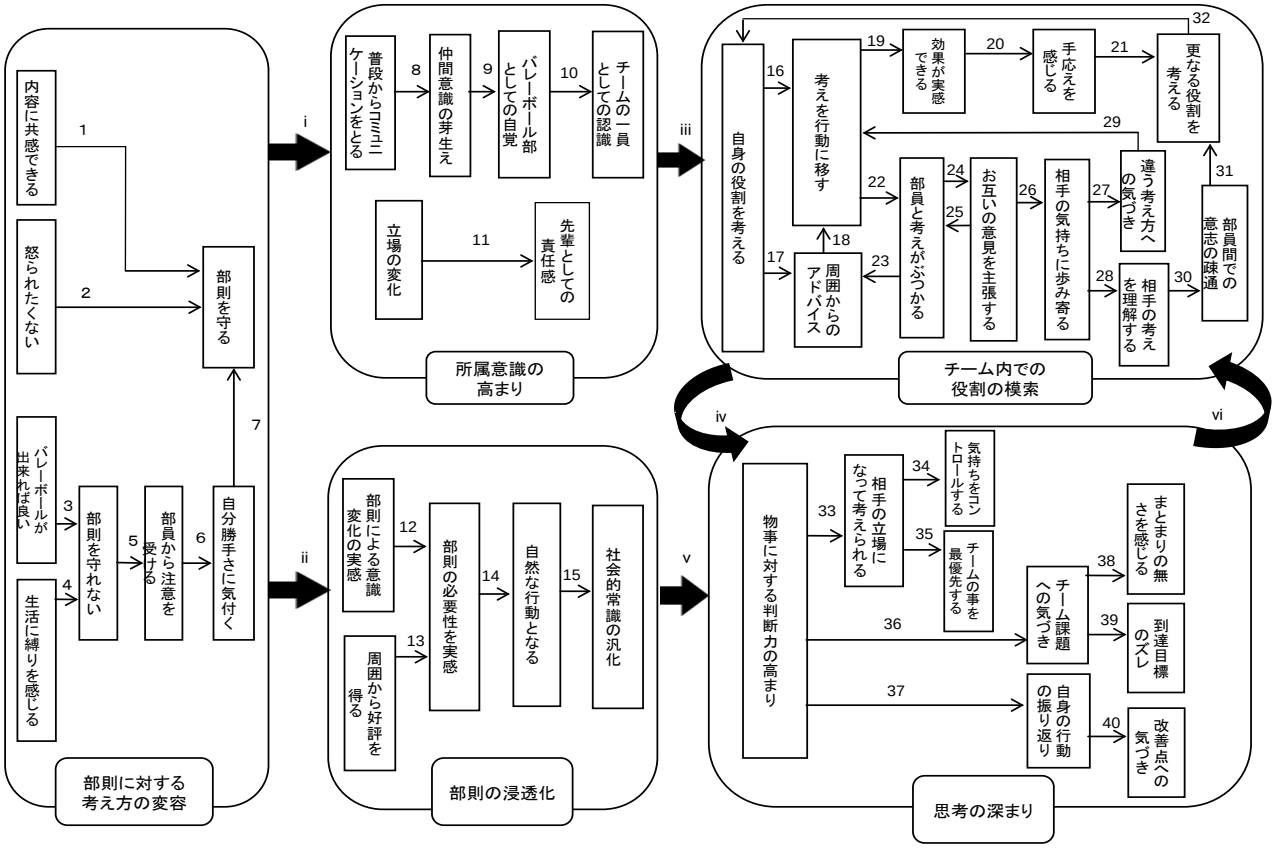

Figure１：部則によって思考が深まるプロセス